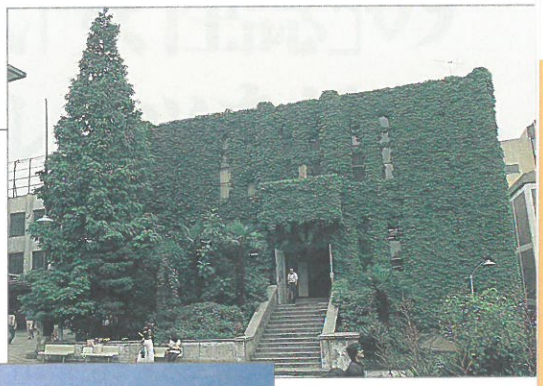
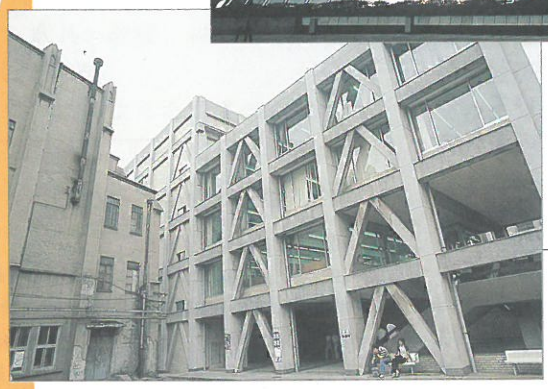
AUTUMN 2001 東洋大学図書館ニュース・コスモス

KOSMOS

特集

現代「女性誌」のルーツを見る





■余暇と本

■白山図書館の変遷

写真上段：蔦に一面覆われた図書館1971（昭和46）年まで／中段：現在の「図書館・研究棟」1995（平成7）年から／下段：「ハ」の字型鎹デザインの南門脇にあった図書館1995（平成7）年まで

http://www.toyo.ac.jp/libra/ NO.135

余暇と本 —就寝前の楽しみ—

東洋大学学長　神田　道子

仕事柄、本は生活のなかで重要な位置を占めている。講義ノートを作るための本や研究のための本などは、否応なしにそろえて読まなければならない。それらは、楽しみというよりも仕事をしていく上で必要な資源を仕入れ、創っていくことであり、それをしなくなれば、資源は少なくなり枯れていく方向へと向かっているといってよい。その点で、仕事に関係した本や論文に目を通し読むことは、教育・研究を仕事としている者の義務といっても差し支えないだろう。

こうした仕事上、必要な本を読むことは私にとって当然であり、日常生活の重要な部分を占めてきたのだが、昨年9月から学長職という現在の仕事に就いてから、その生活が大きく変わってしまった。これまでのように、多くの時間を一人静かに本を読むのに使うというわけにはいかず、会議など多様な仕事を次々と行っていくという生活が中心になってきている。

そのなかで、大きくなってきている本との付き合い方が、余暇としてのそれである。それは「仕事のために本を読む」ことの対極にあるといっても良い。

現在のところ、身近に置いてあるのが一つは旅行の本である。それも写真が多く入っていて、それに文章がついているような紹介的なものが気に入っている。読むというよりも綺麗な写真と文を見ているといっても良い。それを見ていると、まだ行ったことのない町の様子がイマジネーションをかきたててくれる。就寝するまでのひとときを楽しい遊びの世界に浸る。そのときに、土地を紹介する辞典のような本も傍らに置いておき、現実の町の状況や位置を知る。今のところ、もっぱらイギリスで遊んでいる。これは続きがあるわけでなく、それぞれの土地、町が独立して紹介されているから、眠くなればいつでも本を閉じることができる。これがねる前の遊びであり、楽しみになっている。

もう一つが、外国の推理小説を読むことである。アガサ・クリスティが比較的好きだが、それだけでなく女性作家のもので面白そうだと買い込んでくる。こちらの方は食べ物だとかご近所の付き合いといった、日常生活が見えるところがよい。旅行の本とは違って、少しまとまった余暇の時間が取れるときの本である。

実は、両方とも日本のものでなく外国のものを好んで読むのは、現実と距離があり、イマジネーションの幅が大きいからだと思う。目の前にある写真や文章を手がかりにしながら、人や土地、家族の生活などをイメージするのはとても楽しい。仕事が忙しければ忙しいほど、そして仕事の内容が現実的であればあるほど、余暇のための本の楽しさは大きく、捨てがたい。

PROFILE

神田　道子（かんだ みちこ）

1935年1月　東京生まれ
1957年　お茶の水女子大学文教学部教育学科卒業
東京大学教育学部研究生、（財）労働科学研究所等の勤務を経て、1972年より、本学文学部教育学科教員、2000年9月より学長に就任され丸1年、多忙な日々を過ごされています。

特集

現代「女性誌」のルーツを見る

文＝小野沢　うばら
資料／東洋大学附属図書館所蔵

街の何処の書店でも見かける立ち読み光景、只読みともいうそうだが、人数が多いのは女性誌コーナーである。

ファション、美容、料理、育児誌など、表紙の取り取りの色彩が溢れ、重なり合って活気がある。気になる特集号の見出し、女性誌は立ち読みでも手っ取り早く必要なコツを仕入れられる、つまりすぐ役立つ方針で編集されているようだ。

「ジェンダー」「女性学」が問われ、目覚しい女性の社会進出、意識の向上が見られる一方で、書店の一隅を飾る女性誌の数々からは、今なお、根深い女性の社会的位置付けがのぞいているように思える。男女平等と良妻賢母のバランスの一点を、女性向に編まれた、江戸期の日用の“女往来物”から透かし見をしてみよう。

この往来書の形は、平安中期に遡って藤原明衡が編んだといわれる、平安貴族社会の書簡の文例集『明衡往来』として今日に伝わっている。日本の往来物のはじめとされる。

庶民層にも読み書きの必要が高まった室町時代の中期頃から、日用の往来物が諸分野で編まれ、諸種の往来物が盛行する。代表的なのが『庭訓往来』である。これは初学者のための書簡文範例で十二ヶ月の書簡往復形式を、衣食住、職分職業、仏教、武具、教養、雑、他、文学などの詞で文例としている。

“往来物”とは、このような形式の実用書の総称であるが、実際に『□□往来』と書名が付けられている場合が多い。余談だが、昭和の中期頃までは、外、表、路地などを庶民の間では“往来”ともいっていた。

このように往来物が普及したのは、江戸期の印刷技術の発達による所が大で、残存の往来物からも、日本文化、出版文化史を併せて見ることができる。

当時の出版文化には、女性も恩恵に浴している。女往来物も種々出された。多くは家庭向け実用を主としているが、“女”と一括される特徴がそのまま当時の女性観を顕わしている。

江戸期では、数えの十三・四才頃からが、嫁入り時だったという。早くから常識と家事技術を習得する必要から『裁縫早まなび』や『漬物重宝』のような実用書も出版されていた。しかし、家事は、専門性を必要としない分浅くとも広い知恵が要求される。これに応えて家事、社会常識から家庭運営、身嗜み、教養書、その上娯楽性までの総合性のある“女往来物”が編まれている。つまり女一生の百科全書の形で、今日の家庭百科全書より間口は広いかも知れない。

社会大路を往く男性に対して、女性用は、既出版の往来物を更に易しく、抄訳、意訳した、例えば、女四書（大学・中庸・論語・孟子）、女今川（今川了俊〔室町時代〕が書いた家訓）、女用文章、消息詞などが編まれている。最も大きな特徴は、必ず『百人一首』が50丁分（100頁）

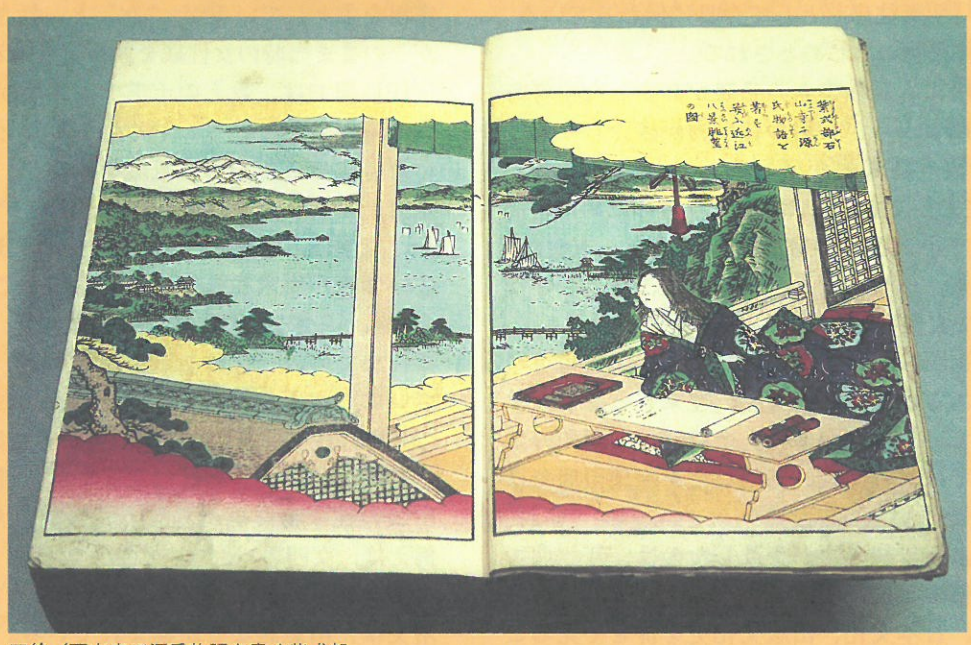
（6Pへつづく）

資料写真

『孝貞教訓　群玉百人一首千歳宝』

表紙／枕になりそうな厚さがある

本文頁／上段には、別の内容が絵入りで書かれている



口絵／石山寺で源氏物語を書く紫式部

「目次」の色々

『百人一首女用文章　女遊學操鑑』の目次　　文化十三（1816）年　再刊　丁数不揃　厚さ約7cm

『日用婦人珠文匣雑録　秀玉百人一首小倉栞』の目次（古典文庫旧蔵書）
嘉永三（1850）年　再刊　一九六丁（392頁）　厚さ約7cm　短冊に個々の内容が書かれている

含まれることである。従って、百人一首を主としたものは50丁余の紙数で、大体中型本に仕立てられ、実用記事が一丁の上欄などに入れてある。一方の総合性のものは、大型本で厚冊仕立て、一例を掲げると、『孝貞教訓　群玉百人一首千歳宝』は、大型本、245丁（490頁）約7cmの厚み、池田東籬等文、松川半山等画、天保十四年（1843）再刊（初刊は天保二年）、目次は50項余、口絵が見開きで五図、その豪華な彩色は溢れ出さんばかりである。それほど豪華ではないまでも、明治初期まで、女往来物は出版されていた。百人一首が含まれるのは、和歌を空暗じ、文字の訓みを覚える女性の教養のためと、江戸庶民の間に浸透し、娯楽としても定着していたからではないか。挿し絵の中にも、当時のかるた取りの図がある。女性は仮名を読み、識字率も高くなっていたと思われるが、百人一首も総ルビ付きである。字を読むというよりも、絵解きの早分かり的な図解が多く家具・調度・衣装は、庶民の姿ではなく上流社会風。十二単衣や、裾長の内儀姿に、明治期には、テーブルと椅子、女踏服（洋服）の女性像、髪も結い上げて、裾から靴が覗いている。内容構成は変わらなくても、ファッションには反応を示している。

女往来物は出版事情にも特徴があって、個々の板木での再編成の跡が見られる事である。厚冊になると全く別本の丁数（頁数）が付いていたり、丁数が続いていないもの、他の往来でも見た刷りの特徴など、いわば寄せ集め的製本の痕跡が見えるものがある。ただ、浮世絵流行の時代であったから、口絵、挿絵には一流の絵師が名を連ねる。必ず売れる浮世絵に、版元は、一流の絵師・彫師・刷師も揃えて抱えていたからであろう。この版元へ、富裕な町人が、娘の嫁入り道具の一つとして、特注したと思われる、厚冊の豪華本を、俗に“嫁入り本”といっている。実用兼、家居のつれづれを娯しませるために持たせたと思えるが、持参品となる程高価だったのかも知れない。

百人一首を含む女往来物は、現存するだけでも1,700種余を数える。

江戸期の“女往来物”厚冊、豪華本を見た眼をそのままずらせ、現代の総合女性誌の上に重ねてみよう。

豪華なカラーグラビアを満載して、大方30代を中心に、上限を50代に読者層を捉えて編まれているようである。OL層や主婦盛りにとって、豪華なグラビアから、現実からしばし離れた空間に遊び、リッチな生活の匂いを嗅ぎ、憧れの外国旅行を想像することができよう。目でご馳走も味わえる。それは、狭い空間から空を仰ぐ形に似ているが、女であることを忘れないように編まれている。

仕様はA4変形、菊倍判といった大型、1冊アート上質紙で250頁前後。ある大型書店では、輸入誌が27種、国内誌は総合誌の中には6誌、婦人誌は35誌、スペースを広く取って並べてあった。（因みに、現代でも知性、教養を主眼とする女性誌は中型だった。）美しく、重い大型誌は、週刊―月刊・隔月刊が、300円から700円どまりが多かった。総合誌系には、家庭生活・子育て・娯楽性のものがあり、健康管理と生き方は医療誌の方に並べてあった。輸入誌は、息の長いものが選択されていて、暮らしと女性、ファッションを内容とするものが多く、それぞれ各出版社によって方向性が打出され、編集されている。知性を強調、「より広い視野を」「より美しい貴女を」と。

本学には、現存する女往来物のうち、130種余りが所蔵されている。この、少しもタイム・スリップを感じさせられない、江戸期の女往来物をめくりつつ「女性学」にも思いを致す、この秋の読書のひと時はいかがでしょう。

PROFILE

小野沢 うばら（おのざわうばら）

1933年9月　東京生まれ
本学、大学院文学研究科国文学専攻、校友。元国立国会図書館勤務。図書館刊行の古典籍関係資料編集にご尽力いただいています。

白山図書館の変遷

伊藤　良久

「蔦のからまる図書館」は、文字どおり蔦が全館を覆っていた。西側に桐の大木があり、根元に「花ニラ」(観想の花にたとえられている)が群生していた。この建物は、1929(昭和4)年に落成し、戦火をくぐり抜けてなお健在であった。

わたくしが図書館で勤務を始めた1965(昭和40)年頃、図書館の2階の閲覧室と書庫の間は、カウンターで仕切られていて、利用者が直線的に書庫に入れない構造になっていた。職員が利用者の質問を受けて目録検索をする必要がある時は、事務室のドアを開閉して出入りしていた(今の銀行に比べても動線が長かった)。そのため、利用者に詫びを言いながらカードケースを引き抜いて持参してもらうことがたびたびであった。

また、利用者を書庫に入れざるをえない場合が多くなり、わきの扉をつけてもらうことにした。これが実現されるまでには時間がかかったが、実現してしまえばあたりまえのこととなった。

1971(昭和46)年、白山キャンパスの東南に創立80周年記念図書館が完成した。

地下鉄都営三田線白山駅から本学に向かう人は、この逆三角形のブレース構造の建物を仰ぎながら坂を登った。図書館は図書館資料の保存のために冷房設備が入れられ、夏季は利用者が激増した。当時、教室や事務室には冷房設備がほとんど無かったためである。フロアをカーペット敷きにしたこと、利用者対応カウンターが一つに纏められたこと、各閲覧室に個性を持たせたこと、視聴覚室を新設したことなども利用者から好評を得た。わたくしは、サインや利用者用出入り口について意見があったが、それは現在の図書館建築によって実現された。

現在の図書館建設の準備が始まったのは、1986(昭和61)年であった。この計画は白山キャンパス再開発計画の一環であった。この頃から電子機器や電子媒体が飛躍的に発達しようとしており、建築計画は図書館情報システム化とほぼ一体のものとして進められた。この計画は1995(平成7)年6月の開館によって実現した。このことによって、図書館は、利用者からのアクセスが従来に比べて非常に便利になった。図書館サービスの充実と機能的な設備によって、利用者が飛躍的に多くなった。

コンビニや宅配便、携帯電話に象徴されるように、わたくしどもは限りなく利便性を追求する。便利になれば利用が増え、そのことによって更に欲求が高まっていく。

図書館も、環境が良くなり、サービスが向上し、利用者が増え、要望は多様なかたちで寄せられている。地下1階のご意見箱(Enquete Box)に投函される投書は、その一端を反映している。わたくしどもはできるかぎりその要望に応えたいと思っているが、ものごとは直線的に一足飛びに改善されるものではない。わたくしがそう思うようになったのは、図書館の変遷を知っており、そしてまた、おそらく、齢を重ねたためだろうと思う。

PROFILE

伊藤　良久(いとうよしひさ)

1943年5月　鳥取県生まれ
1965年就職。(司書講習受講生)
1970年東洋大学社会学部応用社会学科図書館学専攻卒業。元図書館事務部次長。今年3月、退職されました。

INFORMATION

図書館ニュース『KOΣMOΣ』はホームページでご覧いただけます。
http://www.toyo.ac.jp/libra/

白山

●大学祭（白山祭）に伴う閉館のお知らせ

下記、大学祭（白山祭）期間は閉館いたします。

11月15日（木）～11月19日（月）

●メディアスクエアにDVDプレイヤー5台を設置しました！

ブースNo.28～31（2人用）　ブースNo.32（5人用）

●冬季長期貸出を行います。

貸出期間	12月5日（水）～25日（火）
返却期限	2002年1月10日（木）

朝霞

●3階グループ学習室が8室になりました！

ご利用の際はカウンターにお申込みください。

	No.1	20名（現行）
	No.2	20名（〃）
New	No.3	10名
New	No.4	8名
New	No.5	8名
New	No.6	8名
New	No.7	8名
New	No.8	5名

●個人閲覧席が増えました！

New 1階に14席増設

New 3階大型本コーナーに2席増設

●データベース検索に新メニューが登場しました！

New 日経テレコン21

新聞・雑誌検索、企業情報、経済統計等の情報をインターネットで検索できます。ご利用の際はカウンターにお申込みください。

●大学祭（朝霞祭）に伴う閉館のお知らせ

下記、大学祭（朝霞祭）期間は閉館いたします。

11月15日（木）～11月19日（月）

●冬季長期貸出を行います。

貸出期間	12月5日（水）～21日（金）
返却期限	2002年1月15日（火）

尚、貸出冊数枠が図書10冊・視聴覚資料5点までになります。

工学部

●大学祭（工学祭）に伴う開館のお知らせ

大学祭（工学祭）期間中、工学部分館は開館いたします。どうぞ、ご利用ください。

11月8日（金）～11月12日（月）　※11日（日）は除く

開館時間

11月8日（木）・9日（金）・12日（月）	9：00～17：00
11月10日（土）	9：00～13：00

●新図書館への引越し作業に伴う閉館のお知らせ

新図書館の竣工に伴い、冬季休暇期間を利用して新図書館への移転を予定しています。

※変更がある場合にはその都度掲示します。

板倉

●大学祭（雷祭）に伴う閉館のお知らせ

下記、大学祭（雷祭）期間は閉館いたします。

11月2日（金）～11月5日（月）

●閲覧座席が増設されました。

1F閲覧座席が24席増設されましたので、ご利用願います。また、このことに伴い1F雑誌展示架の一部、軽読書コーナー、及び新聞コーナーの位置が少し変更となりましたので併せてお知らせいたします。（詳細は館内の掲示をご覧ください。）

●冬季長期貸出を行います。

貸出期間	12月4日（火）～21日（金）
返却期限	2002年1月10日（木）

※雑誌は通常貸出

全館

大学祭および冬季休暇等の閉館期間中の図書の返却は、最寄の図書館のブックポストにお願い致します！

東洋大学図書館ニュース　コスモス　2001 秋 No.135　2001年10月発行
編　集：コスモス編集委員会
発行人：笠原　俊宏
発行所：東洋大学附属図書館　東京都文京区白山 5-28-20　Tel. 03（3945）7324
制作・印刷：（株）松涛企画